

‘Look, Grandpa!’ cried Charlie. ‘There’s a door in the wall!’ It was a green door and it was set into the wall of the tunnel just above the level of the river. As they flashed past it there was just enough time to read the writing on the door: STORE-ROOM NUMBER 54, it said. ALL THE CREAMS – DAIRY CREAM, WHIPPED CREAM, VIOLET CREAM, COFFEE CREAM, PINEAPPLE CREAM, VANILLA

CREAM, AND HAIR CREAM.

‘Hair cream?’ cried Mike Teavee. ‘You don’t use hair cream?’

‘Row on!’ shouted Mr Wonka. ‘There’s no time to answer silly questions!’

They streaked past a black door. STORE-ROOM NUMBER 71, it said on it. WHIPS – ALL SHAPES AND SIZES.

‘Whips!’ cried Veruca Salt. ‘What on earth do you use whips for?’

‘For whipping cream, of course,’ said Mr Wonka. ‘How can you whip cream without whips? Whipped cream isn’t whipped cream at all unless it’s been whipped with whips. Just as a poached egg isn’t a poached egg unless it’s been stolen from the woods in the dead of night! Row on, please!’

They passed a yellow door on which it said: STOREROOM NUMBER 77 – ALL THE BEANS, CACAO BEANS, COFFEE BEANS, JELLY BEANS, AND HAS BEANS.

‘Has beans?’ cried Violet Beauregarde.

‘You’re one yourself!’ said Mr Wonka. ‘There’s no time for arguing! Press on, press on!’ But five seconds later, when a bright red door came into sight ahead, he suddenly waved his gold-topped cane in the air and shouted, ‘Stop the boat!’

1. 田村隆一訳

「おじいちゃん、ほら！」と、チャーリーが叫びました。「壁に、ドアがついてるよ！」ドアは、みどり色で、トンネルの白い壁に、ちょうど、水面とおなじ高さのところに、ついていました。舟が、すこいはやきで、そのドアの前を、通りすぎたので、ドアの文字が、どうにか、やっと読めるくらいでした――

貯蔵室54号 クリーム類――牛乳クリーム、泡立てクリーム、すみれクリーム、コーヒークリーム、パイナップルクリーム、バナナクリーム、ヘアー・クリーム。

「ヘアー・クリームだって！ まさか、髪の毛につける、あの、ヘアー・クリームを、チョコレートに、つかうんじゃないでしょうね？」と、マイク・テビーが、叫びました。

「もってこい！ そんな馬鹿げた質問に、答えているひまはないぞ。」と、ワンカさん。

こんどは、黒いドアの前を、矢のように走りすぎました。そのドアには――

貯蔵室71号 泡立て器――あらゆる形と大きさのもの。

それからまた、黄色のドアの前を、サッとすぎました。そのドアには――

貯蔵室77号 豆類――ココアの豆、コーヒーの豆、ゼリービーンズ。

2. 柳瀬尚紀訳

「ほら、おじいちゃん！」と、チャーリーが叫んだ。「壁にドアがある！」

緑色のドアが見え、それがトンネルの壁に、川の面とちょうど同じ高さに造りつけてある。ビューンと通りすぎながらも、ドアの文字は読みとれた。貯蔵室54、と書いてあった。クリーム類――牛乳クリーム、ホイップクリーム、スミレクリーム、コーヒークリーム、パイナップルクリーム、バナナクリーム、ヘアークリーム。

「ヘアークリームだって？」と、マイク・テレヴィズキー。「ヘアークリームなんて使わないだろう？」

「漕いで！」と、ワンカ氏が叫ぶ。「くだらん質問に答えるひまはない！」

今度は、黒いドアの前を通る。貯蔵室71、と書いてあった。鞭――全形状全サイズ。

「鞭だつてさ？」と、イボグラーク・ショッパ。「鞭なんて、何に使うの？」

「クリームを泡立てるんだよ、もちろん」と、ワンカ氏。「鞭がなくてはクリームをホイップできないだろ？ ホイップクリームは鞭打ちホイップしなくちゃホイップクリームにならない。落とし卵は落とし卵にならん、真夜中に森の中の落とし物の卵をくすねてこなくちゃ！ さあ、漕いで！」

つぎに通った黄色のドアには、こうあった。貯蔵室77――豆類全、ココア豆、コーヒード、ゼリービーンズ、ゼニクイ豆。

「ゼニクイ豆？」と、イボグラーク・ショッパ。

「きみがそうじゃないか！」と、ワンカ氏。「問答しているひまはない！ 急いで、急い

Roald Dahl, *Charlie and the Chocolate Factory*, Chapter 23

‘There you are!’ cried Mr Wonka. ‘Square sweets that look round!’

‘They don’t look round to me,’ said Mike Teavee.

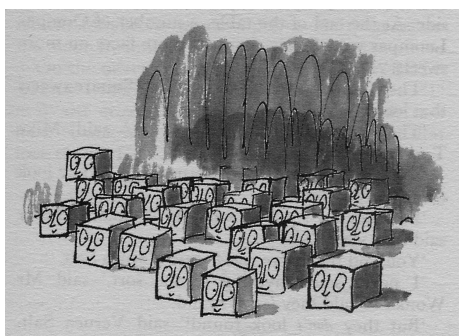
‘They look square,’ said Veruca Salt. ‘They look completely square.’

‘But they *are* square,’ said Mr Wonka. ‘I never said they weren’t.’

‘You said they were *round*!’ said Veruca Salt.

‘I never said anything of the sort,’ said Mr Wonka. ‘I said they *looked* round.’

‘But they *don’t* look round!’ said Veruca Salt.



‘They look square!’

‘They look round,’ insisted Mr Wonka.

‘They most certainly do not look round!’ cried Veruca Salt.

‘Veruca, darling,’ said Mrs Salt, ‘pay no attention to Mr Wonka! He’s lying to you!’

‘My dear old fish,’ said Mr Wonka, ‘go and boil your head!’

‘How dare you speak to me like that!’ shouted Mrs Salt.

‘Oh, do shut up,’ said Mr Wonka. ‘Now watch this!’

He took a key from his pocket, and unlocked the door, and flung it open . . . and suddenly . . . at the sound of the door opening, all the rows of little square sweets looked quickly round to see who was coming in. The tiny faces actually turned towards the door and stared at Mr Wonka.

‘There you are!’ he cried triumphantly. ‘They’re looking round! There’s no argument about it! They are square sweets that look round!’

‘By golly, he’s right!’ said Grandpa Joe.

2. 柳瀬尚紀訳

1. 田村隆一訳

「ほらね！ あれが、キヨロツと見まわす四角いお菓子さ！」と、ワンカさんが叫びました。そして、ポケットから、錠をとり出すと、錠をあけて、ドアを、パツと、開きました……と、とつぜん……ドアのあく音に、何列もならんでいる、小さな四角のお菓子の顔が、いっせいに、ドアの方に、キヨロツと、目をむけたではありませんか。たくさん、小さな顔が、ほんとうに、入口の方をむいて、ワンカさんを見つめます。

「ほらね！」ワンカさんは、鼻高だかと、叫ぶと、また、廊下を歩き出しながら、「お菓子が、キヨロツと、見まわしただろうに！ さ、先を、急ぎましょう！ ぐずぐずしてはいられない！」

「ほら、どうです！」と、ワンカ氏が声はりあげる。「丸目に見える四角いキャンディ
「おれには丸目に見えないぜ」と、マイク・テレヴィズキー。
「四角に見えるわ」と、イボダラーケ・ショッパ。真四角に見える
「いや、まさに四角だ」と、ワンカ氏。「わたしは、四角じやないとは言わなかった」
「丸めだつて言つたじゃない！」と、イボダラーケ・ショッパ。
「そんなことはぜんぜん言わなかった」と、ワンカ氏。「丸目に見えるとは言つたがね」
「だつて、丸めに見えないじゃない！」と、イボダラーケ・ショッパ。「四角に見えるわ！」
「丸目に見えるんだよ」と、ワンカ氏はゆずらない。
「どう見たつて、丸めになんか見えない！」と、イボダラーケ・ショッパが叫ぶ。
「イボダラーケちゃんつたら」と、ショッパ夫人。「ワンカさんの言うことなんか、気にしない方がいいの！ 嘘いつてるんだから！」
「これはいやはや」と、ワンカ氏。「まさか老練なやつたのでは！」
「よくもそんな口がきけるものね！」と、ショッパ夫人がかみつく。
「まあまあ、かみつかないで！」と、ワンカ氏。「さあさ、ごらんください！」

ワンカ氏はポケットから錠を取り出し、錠をカチャツとあけて、さつと扉を開いた……すると、そのとたん……扉の開く音に、何列もの小さな四角いキャンディーが、だれが入つてきたのか見ようと、いっせいにきよろりと目を向けた。小さな顔がみな、扉のほうを向き、ワンカ氏をじつと見る。

「言つたとおりでしょう！」と、勝ちほこつたようにワンカ氏。「ああして丸目に見えるのですぞ！ あれこれ言つても始まらない！ あの四角いキャンディーたちは、ちゃんと丸目に見えている！」

「てへッ、そのとおりだわい！」と、ジョウじいちゃん。